

聖地探訪 (香取市)

日本最古級の薬局「オガワ薬局」

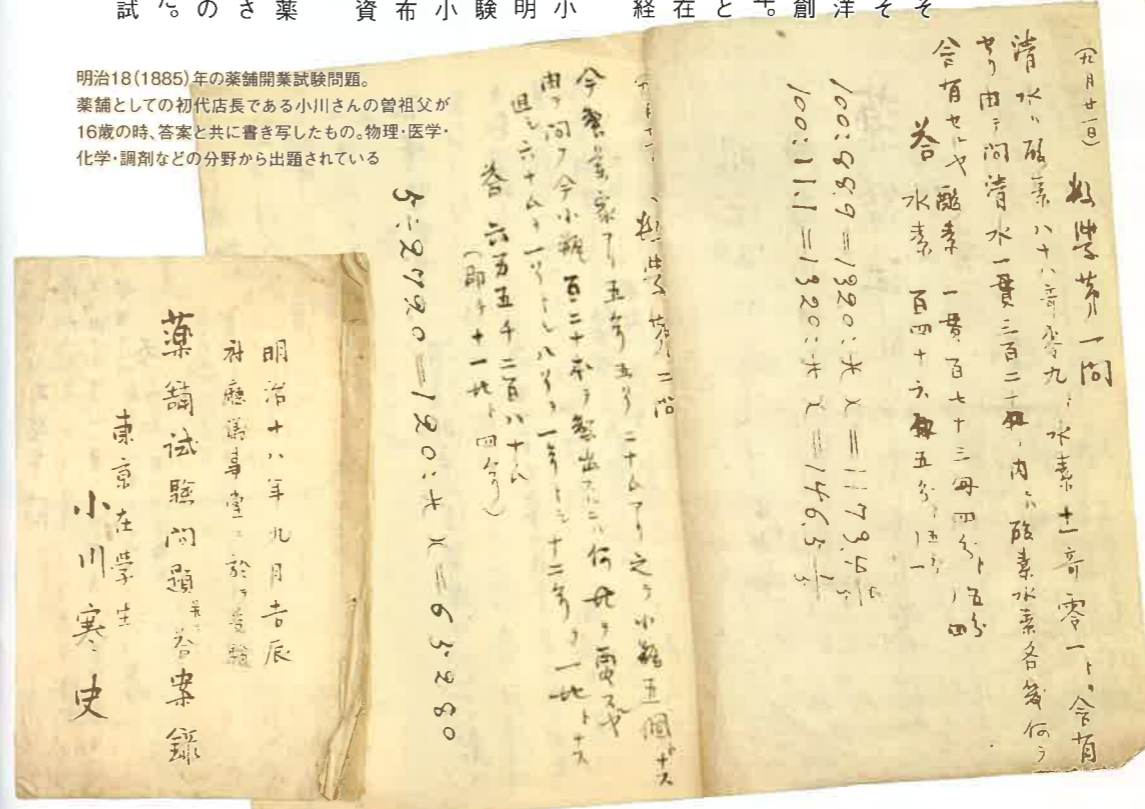
取材文/総合商研(阿部すみれ) 撮影/総合商研(宮本宣明)

「日本最古の薬局」

千葉県香取市佐原地区に、そんな看板を掲げる薬局がある。その名はオガワ薬局。漢方薬と西洋薬の両方を取り扱うこのお店の創業は、なんと明治19(1886)年。約130年もの間、ここで薬局としての営業を続ける老舗だ。現在は4代目店主の小川裕好さんが経営する。

薬局を開業した初代店主の小川欽一郎氏は4代前の曾祖父。明治18(1885)年薬舗開業試験に合格、翌19(1886)年に「小川薬舗」を開業し、明治22年公布された「薬律」により薬剤師の資格を取得した。
小川さんによれば、この時薬劑師名簿には第2号として登録されたので、日本で最も古い薬局のうちの1軒だろう、ということだ。オガワ薬局には当時の薬舗開業試験問題の写本が残されている。

明治18(1885)年の薬舗開業試験問題。薬舗としての初代店長である小川さんの曾祖父が16歳の時、答案と共に書き写したものの、物理・医学・化学・調剤などの分野から出題されている



明治時代の店舗 (昭和20年代に撮影)



先祖は伊能忠敬ゆかりの医師

薬局として開業する以前の小川家は「小川好生館」という、江戸後期から続く漢方医だった。漢方医としての初代小川玄喜氏は隠居するまで佐原の地で暮らした。伊能忠敬の主治医だったらしく、忠敬が測量で全国を巡っていた頃、実家に宛てた手紙には「小川先生によろしく」という意味の文言が何箇所もあるそうだ。



4代目店主 小川 裕好さん
全て手書きの漢方薬の古文書
「昔の人は学力があるよね、今の人はコピーして読まない(笑)」と小川さん。これらを解読して漢方を学んだそうだ



先代の小川さんの父が戦前使用していたドイツ・ライツ社製顕微鏡。先代は第二次大戦中、日本国内で初めてペニシリンの培養・量産に成功したそうだ

明治時代、海外まで出荷されていた「小川胃腸丸」

オガワ薬局と漢方

漢方医として始まったこの店では現在も漢方調剤を行っている。明治時代、漢方医が薬舗や西洋医師としての営業に転身したのは、医薬の業界にも西洋化の波が訪れ、漢方が廃止されようとしていた背景がある。先祖が残した大量の漢方医学の古文書を辞書片手に解読しながら、漢方薬を学んだという現店主の小川さんはこう語る。

漢方も、西洋医学も

「科学を基礎とする西洋の医学の方が論理的なので、法制が整備された明治以降、国策としては、やはり西洋医学でなければならなかった。そういった面で漢方の医学はやや劣るわけです。しかし、今の医学で難しい病気でも漢方の処方ですら治るような場合もありますし、もちろん今の医学でなければ直せない病気もあります。漢方の得意な分野と、今の医学の得意な分野を使い分ければいいんです。」

ある時は体内に充滿した病毒を激しく排出させ、またある時は病気で衰えた元気を優しく補うという漢方医学。西洋医学がどんどん新しくなっていくのに比べ、古くから変わらず引き継がれてきた。「古い医学だけれども、やっぱり現代人にとって変わらない効き目を現します。だからこそ変わらなかつた。価値のあるものだけ残ってきたんです。」
現在オガワ薬局では、服用するまでに手間や時間がかかるが高い効果を得られる煎じ薬を、店内の設備でまとめて煎じ、飲みやすく液状のまま1包ずつパックする「煎じサービス」を行うなど、時代に合わせた「現代の漢方」を提供している。

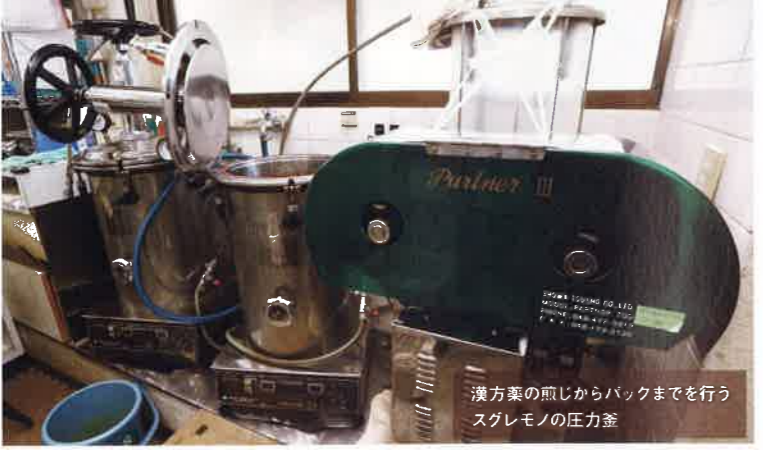
「先祖の業である漢方薬の自家製剤、薬剤師の2号・薬局4代目として今の西洋薬の提供。私は一介の薬剤師ですが、自分のできる範囲で漢方医の時代の仕事も現代的な仕事も両方学び、それを行っている。何とか先祖の業を引き継いで今に通じる部分を活かしている」と小川さん。
「息子と娘が薬科大学に行きますから、薬剤師5代目目についていたら日本でもあんまりないんじゃないかと思う」と笑う。
佐原の大祭や街並みのように、価値ある伝統の1つとして引き継がれていく。

「先祖の業である漢方薬の自家製剤、薬剤師の2号・薬局4代目

オガワ薬局
香取市佐原1612
TEL.0478-52-2570
営業時間/9:00~19:00
日・祝不定休



店内に飾られたかつての看板。左の「津宇救命丸」の看板は明治末期のもので、テレビ番組で鑑定してもらったこともあるという



漢方薬の煎じからパックまでを行うスグレモノの圧力釜



現在のオガワ薬局店舗